

婦人子どもとも



婦人方へ

野口 幽 香

まづ新年おめでたう存じます。とは年寄も子供も、男も女も、金持も貧乏人も、人といふ名のつく人は皆口に稱へ、遇ふ人毎に祝ひあふて、黒塗の祝膳に屠蘇くみかはす人もあれば、十切のお餅買ふにも母親を一考せしめたのもあらうが、兎に角、年末の騒々しさも一晩過くれば俄に長閑さを感じ、同じ寒さの風も急に和らいだ様な心持、まづ元日から三ヶ日七草頃迄は、我も人も何といはれず心のゆつたりとするもので、さすがに人事の複雑も、こゝ一寸は遠慮して、むつかしい相談や面倒なかけ合ひは、一時休の姿で、お雑煮とか歌留多とか、朝から夜迄騒いで居る内に、はや學校も始まる、出来た春衣もぼつ

くよされて来る。さうなつて見ると何の事はない、一寸見た夢の様で、うかくとこ、過してしまふのである。

何が故にさうめでたいのか知らねど、めでたいといつて皆嬉しそらに喜んで居る時に、一人世捨人か何かの様に、めてたかないとこおれるにも及ばぬ、面白く出来るだけ面白く世を渡るのは、誠に望ましい事である。私は考へる、併し何とかいふ坊さんのよんだ歌、かの

門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし

かう考へて来ると、一寸、めでたいくと、うかれてばかりは居られぬ心持となつて来る、お互が一年をとつたのは疑もない事實で、慥に冥土へ一足か十足か近つたのも亦争はれない事實であります。私の知つて居る年寄が多年病床にあつて、それこそ人から見ても、嘸死にたいだらうと思ふ様な人の自白に、かうなつても吾眞情は決して死にたくない、世間の死にたいといふ人は、まだ眞に死の近いて居らぬ人であつて、實際死が近づいては、決して死にたいものではない、せいひました。私、これが人間の眞のさけびであらうと思ひまして、同情に堪へませんでした。かくいふ私も、同じく一ツ年がふえて、次の一里塚へ着いたわけ、かるたに浮かれて居ながらも、一寸まじめにならざるを得ないので、過ぎし年はどうであつたか、一向何も成績がない、をとくしはどうか、それも同様、其前の年は、又其前は、と考へても、一向同じ様で、三年前の自分と、けふの自分と、余り違つても見えません、こ

んな事ではならぬ、今年一月一日からは、勉強もしやう、勞働もしやう、怒るまい、いやな顔もすまい人にも親切をしやう、こうもしやう、あゝもしやう、と希望は新たにわきいで、覺悟はなか／＼見事なもの、それが七草でもすむと、そろ／＼と地金が出て来て、つまる處、一年の終りは又もとの黙阿彌新年が来ると又其覺悟が新たにされる、とかういふ風に、年々歳々同じ事を繰り返して、行きつく先は青山か染井とさまつたもの、併しこれは、私の事で、誰もが決してかうではない、若い男女はいふ迄もなく、年とつた人でも、一年一年進歩して行く人があるので、死ぬまで進んで行く、それが眞の人といふのであつて、私の様なものは一段一寸下つた人といはねばならぬ。されば私は皆様をして、どうぞ私の様な生涯をお送りにならない様に、ふりかへつて去年を見れば、心密かに満足の微笑の出来る様な生涯をおすゝめしたい。

これを讀んで下さる幾百たか幾千たかの人の内には、今年が新年の終りになる人もあるかも知れませぬ不吉の事をいふといはれませうが、どうも事實ですからしかたがありませぬ、しかも其籤の番は誰に當るか知れませぬ、されば皆眞面目に考へて自分が其くじに當つても遺憾のない様に、けふ今より満足の一日を重ねて行きたいではありませんか、満足、人からはどう見えてもよろしい、何となり勝手の批評を下されてよろしいが、自分を知る事自分に勝る者はありませぬから、其自分が深夜靜に考へての満足、良心の満足、無上の平和、これが得られましたならば、其人はたとい自分は女中で、生涯人の臺所

に勞働して終りましたも、其貴さは王侯貴人よりも儘に以上に位して居りまして、又此人一人の満足するのみに止まりませんで、必ず其小さな行が、思ひもよらぬ所へ感化を及ぼしまして、其結果どんな形に現はれて来るかはかられませぬ、人生の幸福を、馬車や御殿に求める様な人は、別者として、右いふ様な幸福を求められんこと希望にたへませぬ。

九段の坂を上つてもなかく苦しいが、富士の頂上迄でも覺悟して上れば、存外容易く行かれるとの事富士にも増して行路難き人生を、奇麗に上り終らうといふには、非常な覺悟がなくてはならぬ筈、それをつたいした覺悟もなく、九段の坂を上る心持で、富士以上の難路を歩まうとする故に、一步一步血の涙を流すのである、子供と青年は先づ別者として、世の中に踏み出した、といふ人は、誰も彼も同じ經驗をするので、幾億かの間人は、同じ難路に泣いて居るのである。併しながらこれも覺悟次第で、喜んで楽しんで、歩いて行く事も出来るのである。然らば其覺悟とは如何なる事かといふに、まづ世の中に立つてから死ぬ迄、一日も休のない戦争があつて、毎日毎日それに打勝つて行くといふ覺悟がなくてはならぬ、これに勝つのと負けるのとで、人間の眞價が定まるので、前にいふた良心の満足とは、此日々の戦争に打勝つた人の状態をいふのであります。人生の最大なる敵は何かといへば、それは已といふ事では一方からいへば、敵身といふ事がこれに對する唯一の武器であります。試に、誰かもし不平があるならば、其原因を調べて御覽なさい、必ず利己といふ事に歸するのであります、不平に思ふ人も利己なれば

不平がらせる人も利己、利己のより合故、そこに衝突が起るので、もしも一方が利己であつても、一方が献身の行爲に出れば、衝突も起らず、一家は平和で、つまり献身した人に、また幸福が歸つて来るわけになる。献身と一口にいへは何でもない様だが、實際はそれはなかくつらい事で、まづ自分が死なねばならぬ、刀をとつて死ななくとも、已、私、我慾、すつかり殺してしまつて、自分の生存は自分以外の人の爲、夫の爲にする人もあるべし、子の爲、親の爲、友の爲、君の爲、社會の爲、何でもよろしいから、自分の居る境遇に應じて、誰かの爲に生きて居るので、自分の樂の爲、自分の幸福の爲、自分の慾の爲に、生きて居らぬといふ事の實行、たとひ其事が以何に小さくとも、人の爲といふ事が凡ての行の動機になつて居れば、それが献身の生涯といふので、一度これが實行の出來たる人は、心の底にいふべからざる平和と喜びが充ちて来て、毎日の眼前の出來事には打勝つて余りある位の勇氣も出て來るものであります。尤此平和忍耐勇氣、これらを得やうといふには、容易の事ではないが、又中には容易に得られる人もあるので、此秘訣を味はつた人が、一家の内に一人居れば、家中平和と喜に充たされるし、社會の中に一人居れば、其人の大小は違ふが、其まはりの人が喜んで暮せる様になるのであります。私に深き感じを與へた實話を左に

昔私の住つて居りました隣の奥さん、それはそれはよく働く人で、朝私が顔洗ふ時、窓から向ふの庭が見えますが、夏ならばいつでも洗濯物が幾枚もはしてあつて、張板にはちやんと張物がしてある、

私はまだ起きたばかりに、と何ともいへず恥かしく思ひまして、もう早幾年かの昔の事で、其人の名も顔も忘れて思ひ出せませんが、其行はしみこんで私をして時々反省せしめます。

も一つのお話は、私の親類のこれも隣の奥さんの事です、子供が六人か七人で女中なし、朝早くから夜遅くまでそれはく働さづめ、きけば夜は十二時迄仕事をなさるとして、其多くの子供達のもの一枚も外に出さぬ、しかも子供のなりは誠に奇麗にしてあつて、玩具等各自引出しが區別してあつて、凡ての躰なか／＼嚴重だそう、雨降りの翌日は大小幾つかの足駄がちやんと洗はれてはしてあるそう、さすがに奥さん自分だけは手がまはらぬと見えて、着物もきたなく髪もぼう／＼として居るとの事、私は此奥さんを見た事もなければ、たつた右の話をきいただけ、それで深く私にしみこんで、又してもく人に語り人も我も怠惰を戒められて居ります。

書いて見れば、一向とりたてゝいふ程の事でもない様でしようが、私に生涯忘れぬ程の感じを與へたのは不思議、此二人、もとより私を知らず、私も亦二人を知りませぬのに、かうも感じるのは、此二人の行が献身的であるからなので、自分の知らぬ感化を人に及ぼすと私の前にいつたのはこゝをいふのであります。

されば私は人間といふ者は、誰に限らず己を捨て、何かの事に従事せねばならぬと思ひますが、とりわけ婦人方に其献身をおすゝめするのは、一家の中心はどうしても主婦でありまして、主婦といふ者は

他家から入り込み、随分習慣思想も違つて居りますから、其人が献身を實行すれば、一家内の平和はうけ合ひ、夫も親も子も下女も、皆喜んでそれ／＼業を熱心する事が出来るので、人生の幸福とは、かゝる主婦をいふのであらうと思ひます、年改まり人の心にも新しき覺悟のほしき時、何かの御参考にもならうかと思ひまして。

